

永遠の呪「観世音菩薩」

川 上 光 代

衆生が苦難に遭遇した時、観音の名号を唱えたり、観想すると観音が現れて、苦難から離れ、欲求を満足することができると、諸經典に説かれている。一体この名号にはどのような効力が潜んでいるのか、考えてみたい。

一 観音の名号

観音の梵名は一般に Avalokiteśvara といわれている。この語は avalokita と isvara とに分解せられ、avalokita は観、isvara が自在を意味し、観自在という漢訳に当たる。しかるに漢訳では観世音と訳されることが多く、観音は省略形と見られる。中央アジアで発見された梵本²には Avalokita-svara の語が見え、svara は音声という意味をもち、観世音の原語はこれである。諸經典の翻訳年代に注意すると、旧訳は観世音、四、五世紀頃から観自在の名号が見られる。それ以後、観世音も観自在も共に用いられている。

異訳には盧楼亘、闍音、現音声、光世音、観世自在、観世

音自在がある。盧楼亘は、梵名からの当て字と思われるが、他は音や自在がついている。

音の字がつく「観世音菩薩」の由来について『法華経・普門品』の前置に、

若有無量百千萬億衆生、受諸苦惱、聞是観世音菩薩、一心稱名、³観世音菩薩即時觀其音聲、皆得解脫。(中略)以是因縁、名観世音。

と説明されている。これによれば衆生が観音の名を聞いて一心称名すると、観音はその音声を観じて、皆解脫することができるという。この意味において観世音は、「衆生の声を観ずる菩薩」ということになる。

「観自在菩薩」の自在については『大宝積経・菩薩見宝・遍淨天授記品』に、

當知是菩薩得五種自在、何等為五。一者壽命自在。二者生自在。三者業自在。四者覺観自在。五者衆具果報自在。³

と、菩薩には寿命、生、業、覺観、衆具果報の自在が具わつ

ている。

「普門品」には、

観世音菩薩、有_二如_一是自在神力、遊_二於娑婆世界_一。

とある。観音は自在の神力によって娑婆世界に遊ぶという。

これら諸經典によれば観自在は、「自在の神力を具えた菩薩」ということになる。

観世音、観自在の名号は、観音の特徴を表している。

密教では観音を施無畏者、大悲施無畏者、大悲観世音、救護苦厄者、蓮華手菩薩などと呼んでいる經典があるが、いずれも観音の働きや持ち物で名付けている。

観音の名号は、観音信仰の変遷を表しており、これからも無限に名付けられると思われる。

二 眞実相の現れ方

衆生が観音を眼前に呼び出すためには、観音の名号 *nanā* を唱えたり、憶念すると、観音は次の如く色 *rūpa* を現し、救済する。

(一) 頭教

「普門品」では、「観世音菩薩」と一心称名すると、仏、辟支仏、声聞、梵王、帝釈、自在天、大自在天、天大將軍、毘沙門、小王、長者、居士、宰官、婆羅門、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、長者婦女、居士婦女、宰官婦女、婆羅門婦

女、童男、童女、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩候羅伽、執金剛の身を現す。この身は衆生が観音を認識し、称名して現れた姿であるから、衆生の認識の表れでもある。

『観無量寿経』では極樂浄土を觀想し、無量寿仏を見、觀世音と大勢至が坐す想いをなす。この想いが成じ終わったら無量寿仏の身相と光明を觀る。続いて觀世音を觀ることを勧めている。觀世音の身相と光明について、

此菩薩身長八十億那由他恒河沙由旬。身紫金色頂有肉髻。頂有圓光二面各百千由旬。其圓光中有五百化佛。如釈迦牟尼。一化佛。有五百菩薩無量諸天。以為侍者。举身光中五道衆生、一切色相皆於中現。頂上毘楞伽摩尼妙寶。以為天冠。其天冠中有二立化佛。高二十五由旬。觀世音菩薩面如闍浮檀金色。眉間毫相備七寶色。流出八萬四千種光明。一一光明。有無量無數百千化佛。一一化佛。無數化菩薩以為侍者。(以下略)

と詳細されている。衆生が観音を觀想して現れた観音の身相と光明は、例えば項の円光の部分を見ると、五百の化仏の一人々に、五百の化菩薩と無量の諸天が取り囲んでいる。これを敢えて構図にしてみれば、外郭に大円が描かれ、中円、小円と集約化され、一つの曼荼羅を形づくっている。観音を觀ようとする者は「當先觀頂上肉髻、次觀天冠」と觀る順が示されている。肉髻から天冠に辿りつくと、そこには化仏が

立っている。つまり肉髻から天冠へと意識の段階を経て、仏の世界に辿りつくことになる。他の部分も同様に、外郭の大円から中円、小円と意識の段階を経て、仏の世界を認識するようになっていく。

(二) 密教

密教では、聖、十一面、千手千眼、不空羂索、如意輪、馬頭などの多面多臂の尊像の前で呪を持することが説かれている。

十一面観音は、頭上の正面三面に菩薩面、左三面に瞋面、右三面に狗牙上出面、後一面に大笑面、頂上一面に仏面を配しているが、この十一の相は何を表しているのか。『解深密教』に十一に分けた仏地について、「一者世俗相、二者勝義相、三者菩提分法所縁相、四者行相、五者自性相、六者彼果相、七者彼領受開示相、八者彼障礙法相、九者彼隨順法相、十者彼過患相、十一者彼勝利相。」と、十一の相を以て決らし、分別して諸法を顯示すると説かれている。これによれば十一面観音は、十一の仏地の相を具えた菩薩であり、第十一の中尊仏に辿りついて皆円満することを表している。

千手千眼観音の多臂の持物や印契については『千手千眼観世音菩薩大悲心陀羅尼』や『千光眼観自在菩薩秘密法経』に、右手持物の月精摩尼は除熱難、錫杖は発善心、宝剣は除翹翹、紫蓮華は見諸仏、青蓮華は生浄土、楊柳枝は除病難、

(以下略)。左手持物の日精摩尼は除眼闇、宮殿は離胎蔵、紅蓮華は生諸天、白蓮華は満功德、軍持瓶は生梵天、如意珠は雨財宝(以下略)と、効能が示されている。観音の姿や多臂の持物、印契の二々を認識すれば、苦から離れ、真実だけが見えてくる。やがて観音は立派な姿に身を飾り、威光赫々として、像の中より出て来て、その人を教え諭すことがある(『大唐西域記』)。

三 呪の意味

何故衆生が観音の nama を唱えたと rupayati (rupa の動詞) を表すのか。

そのことについて『観経』に、

諸佛如来、是法界身。遍入一切衆生心想中。是故汝等、心想佛時、是心即是、三十二相八十随形好、是心作佛、是心是佛。諸佛正遍知海、從心想生。是故應當一心繫念諦觀彼佛多陀阿伽度、阿羅呵、三藐三佛陀。

と、一切衆生の心想の中に入っている仏を諦観することを勧めている。

『大涅槃経』に「一切衆生、悉有仏性」と明かすように、われわれの内にもつ仏への可能性が、名号を唱えるという行法によって仏の姿を作り出す。

仏の姿は衆性の認識によって形づくられることを考えれ

ば、*nāma* は *rūpa* に対する言葉である。従って観音の名号は固有名詞ではなくて、観音を形づくるための呪といえる。

ところが八世紀中頃、パーラ王朝の下で密教は大いに発展し、原始仏教で否定していた呪法は、幸福を招く呪法として陀羅尼に発展して尊像前で呪を持するようになった。

『請観世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪経』には、呪は「過去現在未来十方諸佛大悲陀羅尼印¹⁰」であるので、持すれば、今世に業を受け、後世は仏所に生まれて仏を見、解脱する。そして地獄・餓鬼・畜生・阿修羅の苦と八難の苦から免れるとある。

『十一面観世音神呪経¹¹』には、十種の現世の果報と四種の来世の果報が得られるという、現世来世にわたる観音の利益の絶大さが説かれている。

『千手千眼観世音菩薩大悲心陀羅尼経¹²』には、十五種の悪死を受けなざること、十五種の善生が説かれている。

諸経典に説かれる観音の功德は、いずれも「無有恐怖」「遠離顛倒夢想」で「究竟涅槃」である。永遠の呪を持する者が得ることは、すべてに障りがない。障りがないから恐怖がなく、心に湧き起こる一切の顛倒がなくなり、涅槃を完成することができる。

顕教、密教ともに、身近かな除災によって人間生活浄化への道をはかっている。その実践行は、顕教では心の内にある

一片の真実を現すために観音の名号を唱えたが、密教になると観音像を前にしての呪法に変化していった。しかし「聞^レ名及見^レ身、心念不^ニ空過^一、能滅^ニ諸有苦^一」(「普門品」) ことには変わりがない。

観音の名号や呪には、永遠絶対の仏の教えが入っていて、唱えれば観音が現れ、仏の世界を示唆する。衆生は観音の姿を観て仏の世界を認識する。仏の教えを言葉で説明すると、その言葉にとらわれてしまう。ただ一心に「観世音菩薩」と唱えるところに、仏の世界が広がるのである。

- 1 印度本による翻訳は観自在、亀滋本による翻訳は観世音。
 - 2 『大正藏』第九卷五六頁下。
 - 3 前掲書、第五卷三八七頁下。
 - 4 前掲書、第九卷五七頁下。
 - 5 前掲書、第一二卷三四三頁下—三四四頁上。
 - 6 前掲書、第一二卷三四四頁上。
 - 7 前掲書、第一六卷七〇九頁上。
 - 8 前掲書、第一五卷九二五頁下。
 - 9 前掲書、第一二卷三四三頁上。
 - 10 前掲書、第二〇卷三四四頁下。
 - 11 前掲書、第二〇卷一四九頁中。
 - 12 前掲書、第二〇卷一一六頁上一中。
 - 13 前掲書、第九卷五七頁下。
- △キーワード▽ 観世音菩薩、観自在菩薩、真実相

(南山宗教文化研究所非常勤研究員)